
みた】ソワカちゃん第10話（その2）偽訣「タイムマシン・ノー・リグレットの記」【ソワカちゃん】

衛街衢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【書いてみた】ソワカちゃん第10話（その2）偽訣「タイムマシン・ノー・リグレットの記」【ソワカ杯】

【Nコード】

N2541I

【作者名】

銜街衢

【あらすじ】

宿 護法少女ソワカちゃん2周年！第10話（その2）のサイドストーリー的な何か、と見せかけて、舞台は勝手に過去世、親の因果がコニカミノルタ、タイムスリップしちゃったソワカちゃん&クーヤンのお話。第2回ソワカ杯参加、出遅れたあげくやたら長い。ソワカちゃんって何↓<http://www.nicovideo.jp/mylist/3633617>

巻（前書き）

本作は、怪しげな石神いしかみからのメッセージに従って狐憑き、自動筆記のままに書き記したもので、あくまで個人的な解釈に基づくストーリーなので、設定とかそれっぽいこと書いてますが全部嘘出鱈目狂言綺語です。あと、無駄に長いので、人生を有意義に過ごしたい方は、是非スルーされることをお勧めいたします。

壺

怪しい声を上げて、一斉に鳥の群れが木々の間から空へと飛び出していく。灼熱の太陽は容赦なく降り注ぎ、鬱蒼としたジャングルはサウナのような熱気で包まれていた。

「ソワカちゃん……ここどこ……？」

「私に聞かないでよ……」

そんな密林を、張り巡らされたツタをかき分けながら進む2人組——ご存じパパの死の真相を探るため旅する少女・ソワカちゃんと、そのお供の小坊主・クーヤンである。

「もう疲れたよー、オレもう歩けないよう」

「……ちよつとは我慢しなさい。まだただか1時間も歩いてないんだから……たぶん」

「ハア……何でオレたちこんなところにいるんだろう……」

「もう逃げられないぞ、二胡堂寺の娘！」

「くっ……なんでこんなところに必要性をまったく感じない壁が！」

「ど、どうしようソワカちゃん！」

「落ち着くんだソワカくん、量子力学によれば云々かんぬん！」

「ルシファアよ、ヴァジュラバイラヴァよ、オロバスよ……」

「なんだか解らないけど、とりあえずーかハかダイブ！」

というような具合で、2人は何が何だか解らないまま、とにかくメカ沢先生のアドバイスに従い、その頭部を抱えて壁に飛び込んだわけである。幸い、壁はまるで水面のように柔らかく、まったく無抵抗に彼らの体を飲み込んでくれた。しかし一瞬の静寂の後、壁を抜けて飛び出してみれば、洞窟から景色一変、南の島のジャングル地帯だったのである。

「その上メカ沢先生（の頭）はどこにも見当たらないし……」

「どっかで落として来ちゃったのかなあ？」

かくて再び2人きりになってしまったソワカちゃん一行は、とりあえずこのジャングルを脱け出すべく、おっかなびつくり歩みを進めているわけであるが。旅慣れた砂の大地とは勝手も違い、その足取りは遅々としたもの。2人（特に小坊主）の足弱は、早くも限界に近づきつつあった。

「ソワカちゃん、休憩しようよ、休憩」

しきりに休もうとするクーヤンに、ソワカちゃんはもはや言葉をかけようとしめない。しかしそれは、疲れといらだちのせいばかりではなかった。

「ソワカちゃん、一休み、一休みしようよ、5分でいいからさ、ね、ね」

「……クーヤン、さっきのメカ沢先生の話、ちゃんと聞いてた？」

「うん、きいてたきいてた」

「どの辺まで？」

「えーと……メカ沢先生がチベット修業時代にパパ和尚と修行仲間だったところ？」

それ、食事の間に済ませた自己紹介の部分じゃない……ともはやツツコミを入れる気力もなく、しかしソワカちゃんもまたしきりに思い出していたのは、メカ沢先生の口の端に上った、亡きパパの思い出話であった。

「……パパたちの若い頃って、どんな風だったんだろう？」

「あんまり話してくれなかったもんね。マロは口を開けばフランス小咄ばかりだし」

「もっと詳しく、話聞いておけばよかったな」

ぼつり、と呟いて、ソワカちゃんは小さく肩を落とす。クーヤンもしばらくは殊勝らしく黙ってその後に従っていたが、三十秒としないうちに、へなへなとその場に座り込んでしまった。

「あー、もうダメ……オレ、一步も歩けないよ」

「しょうがないなあ」

果てのない道のりに、さすがのソワカちゃんも根負けした様子。ため息をついて、傍らの岩の上に腰を下ろす。

「5分だけだからね」

「やったーっ」

急に生氣を取り戻した様子で、クーヤンも手頃な岩によじ登る。一歩も歩けないんじゃないのか。そんなソワカちゃんの心の声などどこ吹く風、クーヤンは草陰の大岩の上にちょこんと座る。

「こんな得体の知れないジャングル、一刻も早く脱け出したいんだけど……」

「まあしょうがないじゃん、のんびり行こうよソワカちゃん」

「猛獣にでも会ったらどうするの」

「猛獣よりよっぽど怖い人間や化け物は平気で倒すくせに……」

「……クーヤン、」

「お、オレ何も言ってないよ!」

「いや、そうじゃなくて……クーヤンの乗ってる岩、なんか動いてない? ……というか、縦縞ついてない?」

「え」

おそろおそろ視線を下ろしたクーヤン。上る時に気がつかなかったのが不思議なほど、その地肌は岩からほど遠く——黄と黒のストライプをなす細かな毛に覆われ、そして呼吸のリズムに合わせ、静かに蠢いている。クーヤンの顔から、たちまちのうちに血の気が失せる。

「グルルル……」

「ひっ、ひいひい!」

小坊主が転がり落ちるのとはほぼ同時に、?岩?は地響きのようなうなり声を上げて、緩やかにその身を起こす。

「こ、これは岩じゃない……虎よ、虎よ!」

「解ってるよそんなこと!」

先ほどまで岩と見たのは、クーヤンの休みたいという一念が見せた幻だったのか——牙を剥いたそいつは、まさに紛れもなく虎以

外の何者でもなかった。虎は、不意に目の前に現れたこの格好の獲物たちを品定めするかのように、震える2人をにらみつけてくる。

「そ、ソワカちゃん、ば、五鈷杵^{バジコラ}！」

「そ、そ、そうね！ 五鈷杵さえあれば虎なんて……あれ」

「ど、どうしたの……」

「……メカ沢先生宅でシャワー借りた時、忘れてきちゃった」

「ええええ！？」

「ガーッ！」

「「ひいっ！！」」

虎が彷徨を上げるやいなや、素早くソワカちゃんは、クーヤンを盾に隠れてしまう。

「な、何するんだよソワカちゃん！」

「……ゴータマ・シッダルタはその過去世で、その身を自ら飢えた虎に食わせたというわ」

「そ、それがどうしたんだよお」

「クーヤン！ あなたも仏教者^{ブッディスト}の端くれ、ここは捨身の行のチャンス！ うまくいけば来世は仏道に転生出来るかも！」

「そんなの『嫌』だあ！！」

叫んだ拍子に飛び出した漢字が、虎の頭に命中する。虎は一瞬のけぞるが、すぐに体勢を立て直すと、怒りに目を血走らせ、ゆっくりと2人に迫ってくる。

「あわわわわ……！」

「ガルルル……ウガーッ！！」

「おたすけえー！！」

2人が悲鳴を上げた、その時だった。どんつ、と大きく地がとよんだかと思うと、その直後辺りに急に暗い影が差した。次の瞬間、風を切って振り下ろされた何物かが、虎の体を軽々つつまみ上げる。

「パオーン！」

「ぞ、」

「象！？」

鼻で締め上げられ宙に浮かんだ虎の体は、ひときわ高い鳴き声とともに、まるで枯れ木のように投げ飛ばされる。草むらの中に叩きつけられた虎は、小さな悲鳴を一つ残して、一目散にジャングルの闇の中へと逃げ去っていった。

「た、たすかったあゝ」

「……けど、なんで象が？」

「おーい、大丈夫か2人とも」

声のした方を見上げる。どうやら、象の上に誰か人が乗っているようだ――その顔は、ちょうど逆光になっていて見えない。

「あ、はい、なんとか……」

なるほど、この人物に助けてもらった、ということらしい。いわば白馬の王子、いや白象の王子さま。この象別に白くないけど。

（でも今の声、まさか……）

象の背から垂らされたロープを伝い、一人の青年が地上に降り立つ。オレンジ色の、片肩を露わにした法衣――呆然と立ち尽くすソワカちゃんとクーヤンに、その青年僧は人の良さそうな笑顔を見せた。

「2人とも怪我はないか？ ……にしてもこんなところになんて子供が、」

「パパ……」

「えっ？」

「「パパー！！」」

「えーっ?!」

ソワカちゃんとクーヤンは、一直線に彼の胸の中に飛び込んでいた。あの日、唐突にもたらされた別れ――以来、片時もその面影を忘れることのなかったパパが、今現し身となって2人の目の前にいる。触れることが出来る。在りし日と変わらぬ、ちよつと酒臭い匂いに包まれて、2人はただただ泣き続けるばかりであった。

「ぱ、パパって何だ？ 俺は知らないぞ？」

「どうしたんだ、いったい？」

「……」

「いや、こいつらが……」

象の背から、新たに2人の修行僧姿の青年が降り立つ。その人物に気付いたソワカちゃんは、はっとパパの胸の中から顔を上げる。

「メカ沢先生！ それに…… ちよいマロおやじ！」

「えっ……なんで僕たちの名前を？」

そこにいたのは、つい先ほどまで一緒に逃避行をしていたはずのメカ沢先生——しかしその姿は機械化される前、即ち、あの部屋に飾ってあった、チベット修行時代の写真そのままのものであった。マローラモも同じく、長髪のあの姿。そしてはっとパパに目を転じれば、

「パパ……若い……！」

年齢が顔に出ないタイプなのでばつと見解らなかったが、よく見れば確かに、自分の知っているパパより少し若く見える。メカ沢先生とマローラモの方は、片や機械化、片や年齢不詳なのでその辺はよく解らないが。

「パパ？！ 君……日本に婚約者を残してるって言うてたくせに、
フィアンセこんな大きな子供が……！？」

「そんなわけないだろメカ沢！ あと彼女は婚約者とかじゃない！
ソワカちゃんはよろめくように、一步、二歩と後ずさる。」

「もしかして私たち……」

「うわーん、うわーん、会いたかったよお、」

「あーもう！ そろそろ離れろってば！ この小坊主！」
「パオーン」

間違いない。私たちは、過去——自分たちが生まれる前の世界に飛ばされてしまったんだ。

式

「ふーむ……なるほど、そういうわけで清怒川沙流呂せいぬがわしやろつとくんとへも太郎くんは、お父さんの死の真相を捜して旅をしているのだね」

「はい……ところが途中で船が難破してしまつて、気がつけばどことも知らぬジャングルに……」

象の背中、揺られるのは5人の旅人。据え付けられたお座敷の上、ソワカちゃん、否、清怒川沙流呂の語るも涙、聞くも涙の流浪譚。パパと思えば他人のそら似、所詮あてなき二人旅、これも何かの合縁奇縁、せめてしばらく、旅のお供をしたばやと……

（ソワカちゃん！ ソワカちゃんってば）

（何よクーヤン）

（なんでオレまたへも太郎になつてるの？！）

（いや、こないだも自分から名乗つてたから、てつきり気に入ってるのかと）

（そんなわけないじゃん！ そもそも偽名名乗る必要どこにあるのさ？）

（あのねえクーヤン、私たちは今過去の世界にいるの）

（それはもう聞いたよ）

（過去のパパたちの前でうかつな行動取つたら、下手したら未来が変わつたりとか、とんでもないことになるかねないじゃない、極力私たちの正体は秘密にしないと……）

（あ、オレそれ聞いたことあるよ……タイムパトラッシュ！）

なんでそこでフランダースの犬が出てくるのか。あれか、未来変えると天使とか来て連れて行かれるのか。盛大に突っ込みたいところだったが、クーヤンもなんだか自分で納得してるようなので、その辺は深く追求しないことにする。

「そりゃあ大変だったなあ、まあ、これも仏縁って奴だ、俺たちの目的地まで乗せていくよ」

杯片手のパパは真つ赤なにこにこ顔。本当はまた今すぐにも飛びついてしまいたいのだが、さすがにソワカちゃん、少し距離を取って自重している。一方クーヤン、さりげなく隣の莫座に陣取り、ごく自然に寄り添うように座っているのは、「弟」ならではの特権か。床の木目に、人知れず薄い爪が食い込む。転がってきた空の酒瓶が、膝に当たって止まった。

「そうだ、自己紹介がまだだったな。こいつはメカ沢新一。T大の院生なんだが、研究もかねて、ちよびつと私用でチベット修行にやってきた奇特な奴だ」

「ひどい言いぐさだなあ」

「それでこつちがマローラモ。えーと、こいつは……」

「……」

「えーと、まあ、こいつはいつもこんな感じだから、あまり気にしないでもいいよ」

「うん、知ってる」

「え？」

「あ、いや、なんでもないです」

マロは無言のまま、スリッパを頭の上に乗つけて座禅を組んでいる。

「それでこいつ……君たちがパパと見間違えた彼は、西日暮里の二胡堂寺っていう寺の息子で……」

「俺の自己紹介はいいよ、なんか恥ずかしいし」

「そうかい？ ……まあ見ての通り、彼も僕たちと同じ修行僧だ。

僕たちはそれぞれ別々にチベットにやってきたんだが、日本人同士ということ在意気投合してね。まあこうして修行仲間として一緒に行動してるわけなんだ」

約一名、日本人かどうか怪しいのがいる気がするが、その辺はまあスルーすることにする。

「あの……ところで、ここはどこなんですか？」

「おう、そうだメカ沢、目的地はまだなのか？」

「たぶんもうすぐだ。これがさつき通った虎の名産地・羅越、そしてこれが——」

メカ沢先生が地図を広げる。地図……といっても、もはや博物館に飾ってありそうな土色の年代物だが。

「室利仏誓シユリーヴィジャヤ、まあいわゆるインドネシアの一部だね。そしてその奥地にあるこの寺院が、僕らの目的地つてわけだ」

地図のちょうど中央、落書きのような怪物たちの書かれた密林の中に、朱で付けられた印。その傍らには何か文字が書いてあるが、フランス語に通じた（自称）ソワカちゃんにもその解読は不可能であつた。

「でも、なんでまたチベットからはるばるこんなジャングルまでやつてきたんですか？」

「うん、それなんだが……君たちは『バルド・トドウル』という言葉葉を聞いたことはあるかな？」

「ばるとろめう……？」

「いわゆる『バルドソドル』……『チベットの死者の書』、という名前の方が有名なかな」

「ああ！」

メカ沢先生の愛読者であるソワカちゃんは、さすがにその名にピンと来た。

「チベット仏教ニンマ派に伝わる、中間バルドをさまよう死者を導くための経典、それが『バルドソドル』だな」

「この経典は遙か昔、高僧グル・パドマサンバヴァがチベットを去る際、埋蔵経テルマとして残したもので——その後14世紀に入って、カルマ・リンバによって『発見』されて初めて世に出ている」

すでにクーヤンはうつらうつらし始めている。まだ話始まって三分も経ってないぞ。

「ところが俺たちの修行している寺には、この『バルドソドル』にまつわる奇妙な伝承があつてな」

「パドマサンバヴァは西方の国——現在のパキスタンあたりだと言

われているんだが——より来て、チベットに『死者の書』をもたらした。ところが、彼が去って間もなく、もう一人のグルが東方の国より訪れ、『不死者の書』をもたらしたというんだ」

「『不死者の書』！？」

「言うなればもう一つの『バルドソドル』……しかしその内容はあまりに危険なもので、それを巡り争いが起こったため、東方のグルはその經典を携えて、南の島に去ってしまった」

「俺らの師は、その東方の国、つてのは日本じゃないか、つて言うてな」

「そして今も、グルは經典を守る護法尊とともに、そこで仏法興隆の時を待っているというんだ」

「護法尊？」

「埋蔵経は、ふさわしい時が来るまで天部の神々によって守られている、とされているんだ。たとえばダーキニーとか……まあ、基本おっかない神々でね。盗掘者とか、正しい心を持ってない連中が掘り出そうとすると、天罰できめん、つてことだよ」

「そうそう。師が、で、『同じ日本人なら大丈夫だろう、お前たちちよつとそれを探してきなさい』つて言い出したんだ」

「それで早速寺に伝わる古文書や伝承を調べてね、なんとかそのグルが渡ったという島の見当を付けてみたんだが……」

「ま、修行も一段落したし、ちよつとした休暇代わりつてところだなー……あれ、どうしたんだマロ？」

いつの間にか立ち上がっていたマロは、無言のまま前方を指さす。その時熱帯雨林の向こうに、緑に埋れた廃寺が忽然とその姿を現した。

「ごめんください」

寺を取り囲む幾重もの回廊は、ほぼすっかりツタや苔に覆われてしまい、その地肌はまったく見ることも出来ない有様である。遠目には、ほとんど小山のようにしか見えないだろう。それでも、一定の間隔ごとに立つ仏像——それは大部分が原形をとどめないほどに朽ち果てていたが——は、ここがかつてはかなり栄えた大伽藍であつただろうことを示していた。

「誰もいないみたい……」

「おい、メカ沢ー、そっちはどうだい？」

「いやー、まったく人の気配がないみたいだよ」

崩れた壁の向こうから、ひょっこりメカ沢先生が顔を出す。

「何せ、19世紀末に欧米の探検隊が来た時点で廃墟同然の状態だったというからね。それでもその頃は、何人かの修行僧がいたというけど……」

とにかく一行は、中心部を目指して進んでいく。

「かつてここは、代々の王妃の霊を祀るための墓廟で、この国を訪れた僧が必ず足を運ぶほどの聖地だったんだ。そして当時の記録によれば、東方の国から来た一人の高僧が、この寺に詣つたといわれている」

「それが、チベットに『不死者の書』を伝えたグルと同一人物つてことですか？」

「おそらくね。年代的にもだいたい一致している。そして、僕の推測が正しければ、その高僧というのは……」

「あれ、あそこにいるのマロじゃないか？」

小高い寺の中心部、いつの間にかそこまで行つたのか。屋根の上に立つマロの後ろ姿が見えた。そしてその体の向こう、ちょうど腰の辺りに見えるのは、ちいさな虹。

「レデーの前とは思えない振る舞い……」

石段を登っていくと、そこには古びてはいるものの、ひときわ壮麗な精舎。屋根から降り立ったマロを先頭に、一行は建物の中へと足を踏み入れる。

「なんだか薄暗くて不気味だね」

「……へも太郎、その人の裾から手離しなさいよ」

「はははは、いいっていいって」

「……」

「マロ、人の気配はあるかい？」

マロは無言のまま深くうなずく。

「しかし、確かに不気味な場所だな。まるで、誰かに見られているような……」

「うひゃあああああ！？」

不安そうに辺りを見回しながら歩いていたクーヤンが、悲鳴とともにひっくり返る。

「どうしたのよ」

「そ、ソワカちゃん、あ、あれ、あの仏像、」

「くー……へも太郎、仮にも仏教者が仏様見て悲鳴上げるとか……」
振り向いたソワカちゃんは、しかし次の瞬間、ひつ、と甲高い声を上げて硬直していた。

そこには台座の上に立つ、等身大の仏像。しかし目を凝らしてみれば、その姿は仏などとはほど遠い現し身の女性——その造形は精緻を通り越してグロテスク、紗一枚まとっただけの肢態はエロチックというよりは卑猥……はっと周囲を見渡してみれば、これまで仏像と思っていたものどもは全て、これと同様の肉身像である。

「な、なんだこりゃあ！？ メカ沢、これは一体……？」

「うん……さつき、この寺は王妃たちのお墓だつて言っただろう？

これはみんな、歴代の王妃たちのミイラなんだ」

「げげっ」

「特殊な製法で作られているから、生前そのままの姿をいつまでも

保ってるんだ。欧米人の探検家もこれには驚いたらしくてね、向こうではこの寺を『セクシー・テンプル』っていう風に記録してる」

「そう言われてみると、この人なんか色っぽくていいな」

マロと2人、嬉しそうにミイラを見上げるパパに、ソワ力ちゃんは小さくため息をつく。

「……へも太郎、あんたは見ちゃダメ」

「ま、前が見えないよお」

「おっ、こっちなかなかな」

「まったく……」

「におってー」

「ん？」

その時ソワ力ちゃんの視界を、なにかが横切った。

「今見た？」

「目隠しされてたから見えるわけないじゃん」

「におってー」

ぴよこん、とクーヤンの頭の上に、そいつはどこからともなく飛び乗ってくる。ちよつとアレな外見の茶色い奴。

「あ、ヌーメンじゃん」

「どこにでもいるのねこの子」

「ほっ、それを知っているのかね」

廊下の奥、闇の内より、幽鬼のごとく影が浮かび上がる。

「この辺りではそいつのことを、『ヌー』と呼んでいるよ……この寺に昔から住んでいる——まあ精霊のようなものだ」

「日本語……？」

「ようこそ、お客さん」

まるで重力がゼロになったかのように、足音一つ立てずに近づいてくる、声の主。年の頃は50を過ぎた辺りか。禿頭にボロの法衣を身にまとい、口元には穏やかな笑みを浮かべている。

「こんな辺境の寺に、何のご用かな」

「失礼ながらお伺いします。貴方はもしや……」

「「「イー！」」」

メカ沢先生の言葉を遮るように突如物陰から現れ出でたのは、黒覆面姿の三人組。

「あ、あいつら！」

「グルグルの戦闘員！？」

「……また来たのかね」

「イー！」

「何度言われようとも、経典は渡さぬよ」

「イーッ！」

チャッ。いつの間にか戦闘員たちの手には、黒光りするサブマシンガンが構えられている。やばい、こいつら本気だ。^{マジ}ていうかそういうの持つてゐるなら普段から使えばいいのに。

「「「イー！」」」

「2人とも、危ない！」

「きやつ」

3つの銃口が、僧をめがけて一斉に火を噴く。ソワカちゃんとクーヤンは、パパに押さえつけられるようにして身を伏せる。

「大丈夫か？！」

「う、うん」

「メカ沢、マロ、お前らは？」

「ああ、とっさに護身の印を結んだからね……それより、あの人は？」

はつとソワカちゃんは顔を上げる。

眼前の僧は、全身から黒い煙を上げている。見ればその身体は、至る所銃創だらけ——ところがその傷の一つとして、一滴の血を流す様子もない。そして何より、僧自身、全身に銃撃を受けたにもかかわらず、さつきとまったく変わらぬ様子で、涼しい顔をして立っているではないか。

「い、イー！？」

「ど、どうなってるの……」

「言っただろう、私にそういうものは効かないと」

額に開けられた風穴が、みるみるうちにふさがっていく。全身の傷もまた同じだ。

「今日は客人が見えている、帰りたまえ」

「……イー……」

悲鳴にも似た叫び声を上げて、戦闘員たちは一目散に寺から走り去っていく。

「やれやれ、困ったものだ……で、何の話だったかな？」

ため息をつく僧に、メカ沢は慌てて礼拝の姿勢を取る。

「や、やはり貴方は……貴方は、あの高丘親王なのですね!？」

僧はしばし、無言のまま微笑んでいた。硝煙の香る中、一行は固唾をのんで彼を見守る。

「……ふむ。まあ、こんなところで立ち話もなんだな。ついてきなさい」

一同は顔を見合わせつつも、すたすたと歩き始めた僧を追って、寺の奥へと足を進める。

「たかおか……親王？」

「……平城天皇の第三皇子にして、お大師さまの高弟だったお方だ。晩年、天竺を目指して旅に出、そのまま行方を絶ったと言われている」

「お大師さまの弟子……って、千年以上も昔の人!？」

「……高丘親王が旅に出たのは、パドマサンバヴァがチベットを去った直後の9世紀半ば、年代的にも、そして東方から来た高僧という伝承ともぴたり一致する。何より彼が伝えたのが『不死』ということ——弘法大師空海は不死の妙薬である水銀の神、丹生明神を祀り、そして自らも即身仏として入定を遂げているように、『不死』ということに異常な興味を示した人間だ。その直弟子の高丘親王ならば、『不死者の書』を伝えた人物としては申し分がない……」

「だがメカ沢、『不死者の書』をもたらしたのが高丘親王だというお前の説が正しいとしても、いくらなんでも千年前の人間がそのま

ま生きているなんて……！」

「なら、さっきのをどう説明するんだ？ あれだけの銃弾を浴びながら無事でいるなんて、それこそ……！」

「そうは言っがな……！」

すっかり本気出して理論闘争モードになってしまった2人であるが、全部聞こえているはずの僧は、それにまったく構う様子もなく、迷宮のような廟堂を歩いて行く。相変わらず立ち並んでいるセクシ―なミイラたちも相まって、軽くバッドトリップしちやいそう。

「……我が師が、修業先の中国から一つの経典を日本に持ち帰った」先を行く僧が、ぽつりと呟くように語り始める。

「師はその研究を続け、やがてその秘奥を尽くしたが、その時すでに師の命は消えかかっていた。しかし師が生涯をかけて解き明かしたその経典を理解できるものは、当時の日本にはなかった。そのため師は、」

「……」

「師は私に言った。『この経典はまだこの国の人々には早すぎる。お前はこの経典を日本の遙か南海、羅刹国に隠し、時節が到来するまでこれを守りなさい』」

僧の足が止まる。寺院の最奥、そこには一枚の、巨大な石板。

「これは……！」

「必要性をまったく感じない壁！」

「え？」

「あ、ごめんなさい、こつちの話です」

「……私は、師から託された経典を、この石板に刻み、これまでひたすら待っていた。幸いこの『不死者の書』を守ってきた余慶か——どれだけの時が経っても我が身体は老いることはなかった」

「すると、貴方はやはり……」

「いかにも、私は高丘親王だ。そして、この石板こそが、弘法大師さまから託された『不死者の書』——君たちの言っところの、『バルドソドル』だよ」

肆

『……またしくじったか』

「イー」

ジャングルの片隅に、人目を避けるように立てられたテントが一つ。

テントの中、首をそろえてうなだれているのは、先ほど寺院を襲撃した3人の覆面男。その正面、一台のテレビ電話が、彼らの上座に据えられている。

「イー」

「イー」

『言い訳はいい、なんとしても「バルドソドル」を手に入れたまえ』
ブラウン管の中、ピンク色の男の顔が揺れながら浮かんでいる。

額には赤い渦巻き模様、そしてその異様な両の目は、画面越しに3人を冷たく見据えている。

「イー？」

『何故「バルドソドル」に執着するかだと？ 「不老不死」はもちろんだが、あれにはまだ大きな秘密が隠されているのだ』

「イー……」

『まあ良い。間もなく増援が到着するはずだ。彼女の指示に従い、次こそは任務を成功させたまえ』

「……イー！」「」

ギヤア、ギヤア——迦陵頻伽にはほど遠い、化け物じみた鳥の声が空に響く。

ソワカちゃんはその行方を目で追っていたが、やがて影がジャングルの混沌の中に消えると、ため息をついて足下の小石を蹴飛ばした。夜の闇が、東の空からあふれ出そうとしている。

「ソワカちゃん、何してるの？」

「無為」

「……退屈なの？」

「うん」

建物の前の石段、頬杖を突いてソワカちゃんは腰掛けている。この寺院に到着して、すでに3日目の夕暮れだ。もっとも未だに、立ち並ぶミイラたちには慣れないが。

「クーヤン、メカ沢先生の様子は？」

「えー、何も変わらないよ。今日も朝からずっと、あのお坊さんと一緒に、壁とにらめっこしてる」

「そう……」

石板——「バルドソドル」と対面してからというもの、メカ沢先生はまるで取り憑かれたように、その解読に熱中している。

そこに刻まれた文字は全てひらがなであったが、そのまま読んだだけではまるで意味をなしていない。どうやらその内容は暗号化されており、解読には独自のアルゴリズムが必要らしい。

さっそく一同は親王のアドバイスを受けて、この暗号に挑戦した。ソワカちゃんとクーヤンもこれに加わっていたのだが、まずはクーヤン、続いてソワカちゃん、そしてパパ、マロ——これは元々参加していたのか怪しかったが——と脱落し、今やメカ沢先生ただ一人が、これに立ち向かっている状況である。

「何書いてあるんだか全然わかんなかったね」

「まあ、暗号だからね——そういえば、パパは？」

「えーと……あ、あそこ」

クーヤンのつかえ棒が指し示した先——そこには、屋根の上、連れションをするパパとマロの雄々しい背中があった。

「はあ……」

「いいなあ、男の連帯感って感じだよ。ソワカちゃんには解らないだろうけど」

「解りたくない。……それよりクーヤン」

「なあに、急に怖い顔してどうしたの？」

「あの『バルドソドル』について、どう思う？」

「どうって……」

心から虚を突かれた、という顔で、クーヤンがまごつく。

「えーと……でかくて強そう、って感じ？」

「……あれが本当に『不死者の書』で、メカ沢先生がそれを解読できたなら……」

パパは死ななくても、済むかも知れない。

「でもソワカちゃん、それってあの、なんだっけ、タイムパラケルスス……」

「おーい、沙流呂、へも太郎ー。食事の支度ができたぞーっと」

「やったー！」

一目散にクーヤンは、建物の方へと走り去っていく。残されたソワカちゃんは、再びため息をついて、ジャングルの中に消える夕日を見ていた。

その夜、ソワカちゃんは一人、部屋を出た。

砂漠の月と密林の月、月に違いはあるまいが、蒸し暑い中に煌々と光るそれは、それこそ人を取って喰いそうな不気味な雰囲気があった。ソワカちゃんはまるで魅入られたかのように、それをじっと見上げていた。

月と不死。その昔、中国の嫦娥は、夫を捨てて一人月へと去り、不老不死の神女となったという。今も彼女は月で、夫の矢がそこに届くのを待っているのだろうか。

「どうした、眠れないのか？」

突然の声が、彼女を現し世に引き戻す。

パパは酒瓶を片手に、ほんのり紅潮した笑顔で石段に腰掛けていた。

「パパ……」

思わず漏れた言葉に、ソワカちゃんははっと口を噤む。

「じ、ごめんなさい、」

「ははは、良いって良いって。それより、ここ座りなよ」

パパの手招きに従って、ソワカちゃんはその傍らにちょこん、と腰を下ろす。

「へも太郎は？」

「ぐっすり。あの子どもでも寝れるから」

「……こうして月見酒していると、西日暮里にいた頃を思い出すなあ。夜中に酒飲みながらテルミンの演奏してて、檀家さんに怒られたこともあったっけ」

「……そういえば、日本に婚約者がいるって、」

「ああ、聞いてた？ ……別に婚約してるわけではないんだけど、まあ」

「どんな人なんですか？」

「うーん、一言で言うなら、腐」

相変わらずひどい言いぐさ。

「でも、俺が日本飛び出す時、『待っててあげる』って言ってくれたからなあ」

空になった杯は、たちまちの内に満たされて、夜空を映して光る。「インドやらオランダやら放浪してる時はなんとも思わなかったけど、チベットでメカ沢やマロに出会って、そこで曲がりなりにも修業にちゃんと取り組むようになって……なんていうか、このままで良い訳ないよなあ、とは思ってるんだけど」

それを一気に飲み干して、パパは照れたように笑う。

「って、こんなこと言われても困るよな、ははは」

「あ、いや、そんな……」

「そういえば、沙流呂のパパってどんな人？ そんなに俺に似てる？」

「えーと……」

夜空には、在りし日のパパの面影。隣に現し身のパパがいるのだけど。

「お酒が好きで、お酒ばかり飲んで、仏教徒なのにクリスマス祝

つて、酔っぱらって檀家さんを殴ったり、あと赤ちゃんの頃の私に
お酒を飲ませようとしたり……」

「それはひどい」

「でも私と、どっかで拾ってきたク……へも太郎を分け隔てなく大
切に育ててくれた——そしていつも見守っていてくれた、私たちの
大好きなパパなんです。もし、パパが帰ってくるなら、私は……」

ソワカちゃんはその言葉に詰まった。穏やかな笑顔を浮かべた
まま、自分を見つめるパパの視線に気付いたからだ。

「帰ってくるなら？」

「え、えーと……」

ソワカちゃんははつとして空を見上げる。そこに浮かぶのは、西
日暮里と同じ月。パパが今も見守ってくれていると気付かせてくれ
た、澄み切った月の鏡。ただ真実だけを追い求めようと決めた、パ
パの言葉。

「俺たちの先生は、死^{ママ}つていうのはいつも身近にいて、そいつに捕
まる前になんとか真理に到達することが、人生の目的だ、っていう
ふう^{ママ}に言^{ママ}つてたなあ」

「……」

「沙流呂の様子見てると、そのパパはきっと、その大切なものを見
つけて、それを沙流呂たちに伝えられたんだろうだな」

「は、はい」

「……あーあ、俺もそんなふうになれたら良いんだけど——つて、
なんか抹香臭い話になっちゃったな。うん、飲もう！ 沙流呂も、
ほら、一杯」

「は、はい」

「おっ、なかなか良い飲みっぷり」

たまにこっそり、パパのハブ酒を飲んでたからとは言いつらい。
そういえば、こうやってパパと一緒にお酒を飲むのって、初めてか
も。

「ま、もう一杯」

「どうもどうも。あ、お酌します」

「それじゃお言葉に甘えて」

「どうぞどうぞ」

「どうもどうも」

伍

「ソワカちゃん、ソワカちゃんってば、起きなよ」

「におってー」

「う、うーん……」

猛烈な頭痛と、むっとした熱気の中で、ソワカちゃんは目を覚ました。そこは、あてがわれた寺院の一隅、ボロボロの寝台の上。ベツドのそばには、ヌーメンを頭に載せたクーヤン。

「あれ……私、確か外でパパと……？」

「パパが夜中に抱えてきてくれたんだよ」

ソワカちゃんの頬が少し赤く染まる。

「……ソワカちゃん」

「な、なによクーヤン」

「お酒くさい」

「にお」

「……お腹空いたわね」

「イタタタ、ひっぱらないでよお」

すでに昼過ぎである。ソワカちゃんとクーヤンのお腹が、同時に寂しそうな声を上げる。

「って、クーヤンもごはん食べてないの？」

「それがあのお坊さま、もうちよつとで暗号が解読できそうだから、つて、ご飯の用意してくれないんだ」

この寺での一行の食事は、いつも親王に用意してもらっていた。現地の食材を豊富に使った料理は、エスニックでなかなか美味しいともつぱらの評判である。

「他のみんなは？」

「メカ沢先生は暗号解読、パパはさっき見たらまだ寝てて、マロはミイラを鑑賞してる」

「九相観？」

「におつてー」

「ソワ力ちゃん、オレお腹ぺこぺこー」

「しょうがないわね、台所探して、みんなの分も作ってあげましょ」

「うーん……」

安置される石板の前、メカ沢先生は膨大なメモを前に、一人考え込んでいた。

「あと一步……あと一步なんだが……」

この寺に着いて以来、メカ沢先生はほぼ不眠不休で經典の解読に取り組んでいる。その顔には、さすがに疲れの色が濃い。

「經典はひらがなで記されている——即ち、空海がひらがなと同時に発明したという『いろは歌』が解読のキーとなることは自明……」
破り捨てられたノートの切れ端には、いろは歌と無数の魔方陣めいた書き込み。

「最終的にたどり着いたのは、あまりにも有名な『とかなくてしす』——普通に読めば『咎なくて死す』となるがこれはおそらくトラップ、本当のキーはそのアナグラム、『しとかすてな』、即ち『不死者の書』にふさわしい『死とか捨てな』の言葉——これに従い『し』を消すことで、經典の大部分が解読できる——しかし問題は、アナグラムの中で一字余った『く』……それに『し』を捨てるだけでは、經典の8割までしか解読できない……」

メカ沢は床に、指で何度も「く」の字を書く。

「『く』さえ……『く』の字の意味さえ解れば——『く』の字……？ 『く』字——はっ！ 九字！ 九字護身法——九字の印か！？」

九字——密教でも盛んに用いられる「臨」「兵」「闘」「者」「皆」「陣」「列」「在」「前」の呪法！

「解ける——これなら、この經典の意味が——早く、親王とみんなにこれを……！ ん、待てよ……僕の推測が正しいなら、この經典は……！」

しかしまさにその時背後から、黒い影の一撃が振り下ろされよう

としていた。

「いたたたた……」

「うーん……」

「にお」

一方その頃、ソワカちゃんたちは石造りの床に、盛大に尻餅をついていた。

「びっくりだね、急に床が壊れるなんて」

台所を探してさまよううち、今まで入ったこともないような場所にたどり着いていた二人。みしつ、という音が聞こえた時にはすでに遅く、崩落に巻き込まれて地下一階。

「大丈夫、ソワカちゃん？」

「この高さならクーヤンの漢字を積みめば出れるよね」

「うん……にしても台所どこにあるんだろう？」

「さあ……ん？」

ふと辺りを見回すと、目の前に小さなドアがあることに気付く。

「台所かな？」

「こんなところに？ ……なんか書いてある」

赤ペンキだろうか。半分剥げかかっているものの、ドアには全面に、「入ルナ」の文字。

「……台所かな？」

「にお……」

「……クーヤン、ちょっと開けてみてよ」

「えー、なんでオレが？」

「たぶん台所だから大丈夫！」

「な、なんかも凄く怖い雰囲気なんだよ……？」

とは言ったものの、「するな」と言われたらついしなくなってしまうのが人の性。もしかしたら食い物があるかも、という期待感も相まって、つい抗いがたく、クーヤンはドアノブに手をかける。

「えいつ」

「……とりあえず爆発したりはしなかったか」

2人はそつと、部屋の中をのぞき込む。ドアの印象と違って、中は思いの外整然とした、ごく普通の小部屋。

「あれ、ベッドがある……しかも結構新しい」

「本棚もあるよ。なんだこれ……『ガダルカナル』、『潜行三千里』？ 全部日本語の本だ。しかも戦争関係のばかり」

「ラジオ……？」

「あつ、軍服だ」

ハンガーに掛けられているのは、紛れもなく旧大日本帝国陸軍の軍服である。そして机の上に目を転じれば、写真立てに入れられたその軍服を着た男の写真。

「こ、この人……！」

陸

「な……！」

「ご苦労だったな、メカ沢くん」

急に背後から頭を殴られ、メカ沢はその場に倒れ込む。

「君のような優秀な頭脳の持ち主が来てくれて助かったよ……何せ私は仏教の知識には疎いものでねえ、だがまあ、三十年以上も待った甲斐があつたというものだよ」

「あ、あなたは……み、親王、あなたは、いつたい……！？」

高丘親王は、意識を失いつつあるメカ沢を、酷薄な笑みを浮かべて見下ろす。

「君はもう少し、人を疑うということを実感した方がよいな……」

メカ沢の身体からぐったりと力が抜け、手の中のメモが床に散らばる。

「もっともおかげで、私は宿願を叶えることができる——オン・コロコロ・シャモンダ……」

そのメモに記された真言を、親王は低く唱える。やがて辺りにこの世のものならぬ気配が漂うとともに、大地が怪しくうなり鳴動し始める。

「あ……昨日は飲み過ぎたかな、頭がグラグラする……。おい、メカ沢ー、そろそろ解説は……って、な、なんだこれは！ メカ沢！？」

「やあ……ちょうどいいところに来たな。あとは九字の印を切るだけだ……」

「親王……あなた、何を……」

「不老不死——なるほど、それも十分魅力的だがね。私がほしいのは、その経典を守るといふ護法尊の力だよ。大東亜共栄圏の夢を、今度こそ実現するために」

「……あんた、一体何者だ？」

「さて……」

「そこまでよ！」

「におつ」

その時部屋に駆け込んできたのはソワカちゃんたちである。彼女の手には、あの部屋にあった軍人の写真。その顔は、親王その人に間違いなかった。

「この人は高丘親王なんかじゃない！ この人の本当の名前は、元・大日本帝国陸軍参謀、辻政信！」

「な……！ 旧陸軍の天才参謀と言われ、ノモンハン、インパール、ガダルカナルと数々の作戦を主導、終戦後は僧侶に化けて行方をくらまして戦犯指定を免れ、ほとぼりが冷めた頃に帰国して国会議員となるも、1961年突如東南アジアで消息を絶ち以後生死不明、アメリカ合衆国からも『第三次世界大戦を起こしかねない男』と危険視された、あの辻政信！？」

「説明台詞ご苦労！ いかにも私は辻政信——戦争中偶然この寺院を見つけ、帰国後文献で『バルドソドル』と護法尊の存在を知り、以来ここに隠れてその解読を進めつつ、好機到来を待っていたのだよ！」

「説明台詞お疲れ」

「だが、いささか気付くのが遅かったようだな……臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前！」

「しまった、早九字か！」

「これで護法尊の召還は完了——あとはこれを使役し、再び大東亜を日の丸の下に布かせてもらう」

辻参謀はゆつくりと、石板の前に立つ。凄まじい地響きが辺りを襲う。3人はもはや立っているのが精一杯である。

「くっ……！」

「におつ……」

「さあ、出でよ！ 『バルドソドル』の守護神よ！ 私の行く手を阻む者どもを蹴散ら……！」

その時、巨大な風切り音を辻参謀は聞いた。

なんだ——その音の方向を振り向いた瞬間、鈍色の鉄槌は、すでに彼の目の前にあった。

「ぎゃあああああ！」

「え？」

「うわっ」

「なんだ!？」

横なぎに吹っ飛ばされた辻の身体が、壁に叩きつけられる。

「な、何が……？」

「そ、ソワカちゃん、パパ、あれ！」

「へっ」

3人が見たのは、異様な姿に変じた「バルドソドル」であった。

「て、て、て、て、手が生えてる……」

「あ、足も……！ 足？」

「ど、どうなってるんだ？」

先ほどまで冷たい石板に過ぎなかったはずのそれには、巨大な斧カルタリを擁する腕、タコの触手のように蠢く足——そして表面には、赤い

「天誅」の二文字。

「ど、どういうことだ、あれは『不死者の書』じゃ……」

「違うんだ……」

「め、メカ沢！」

床に倒れたまま、メカ沢はバルドソドルを指さす。

「あの暗号の内容は、本物の『バルドソドル不死者の書』を守るための罠——僕らが『バルドソドル』だと思っていた石板こそが、それを守るための護法尊を封じた依り代——御神体だったんだ」

「じゃ、じゃあ本物の『不死者の書』って、」

「それは……」

「危ない！」

『天誅』の文字が光る。と同時に、バルドソドルはその右腕の斧カルタリを天高く振り上げる。3人がとっさに飛び退いた刹那、地を揺らし

て叩きつけられた斧は、床を深々とえぐっていた。

「逃げるぞ、2人ともし！」

「う、うん！」

「ひー！」

「におつてー」

メカ沢先生を背負ったパパを先頭に、ソワカちゃん、そしてクーヤンは、一目散に部屋を飛び出す。背後で轟音が響く。バルドソドルは斧を振り回し、建物を叩き壊しながら追いかけてくる。

「は、速いよあいつ！」

女体像の合間を縫って、一行は必死に走る。しかしバルドソドルはそいつらをまとめてなぎ倒しながら、最短直線距離でずんずん追ってくる。

「とりあえず、この寺を出るぞ！ ジャングルの中に逃げ込めば、」

「あつ」

「ソワカちゃん！？」

段差に足を取られ、ソワカちゃんが倒れてしまう。

「……へも太郎、メカ沢に肩を貸してやっててくれ！」

「う、うん！」

「大丈夫か！？」

パパはメカ沢を一旦下ろし、ソワカちゃんを助け起こす。

「いたたた……あ、ありがとう、」

「そんなことより、早く逃げるぞ！」

その時、振り下ろされた斧が、2人のすぐそばに突き立てられる。すでにバルドソドルは、2人の目の前に立っていた。

「……！」

巨体に似合わぬ俊敏さで、再びバルドソドルは斧を振りかざす。もはやこれまでか、ソワカちゃんは観念して目を閉じる。

パパ、ソワカは今あなたのいる極楽へ参ります。

「危ないっ」

その時、彼女の身体を突き飛ばしたのは現し身のパパだった。 2

人の距離が離れていく。スローモーションに感じられる時間の中で、斧はパパ一人に襲いかかる。

「パパ!!」

パパの身体は一瞬にして攫われる。悲鳴ひとつ残さず、宙を舞ったパパの身体は壁にぶつかって、地に落ちた。

「パパー!!」

「……待つんだ、清怒川くん! バルドソドルを止める方法が、一つだけある!」

「え……?」

「バルドソドルは『不死者の書』を守るもの、今バルドソドルは、僕たちを『不死者の書』を奪おうとしていると思って暴走している!」

「でも、その『不死者の書』って何?」

「それは、今へも太郎くんが頭に乗せている、『ヌー』だ!」

「えー!?!」

「におってー」

「ヌー——つまり『丹生^{にう}』、不死をもたらす生命力の源だ! おそらくこれを持っているものにはバルドソドルは攻撃しないし、これを返してやればバルドソドルは……!」

「……ほう、良いことを聞いたよ」

「あれ、頭が急に軽くなった」

「におってー」

クーヤンの背後——そこにいつのまにか立っていたのは、ヌーメンを抱えた辻政信であった。

「しまった、ヌーが!?!」

「そっか、こいつ不死身だった……!」

ヌーを抱えたまま、辻はバルドソドルの元に駆け寄る。さっきまで荒れに荒れ狂っていたバルドソドルだが、ヌーメンを抱えた辻は一切攻撃を加えようとしない。

「なるほど、メカ沢くんの言ったとおりだな。さあ、ではバルドソ

ドル、この邪魔者たちを叩きつぶせ」

低いうなり声とともに、バルドソドルが斧カルタリをもたげる。

「う、うわあああ!!」

ガッ、今度こそおさらば、としやがみ込んだソワカちゃんたちの頭上、金属質の音を立てて斧の刃は虚空に留まる。おそろおそろ顔を上げた彼女たちの前に立っていたのは、印を結んで立つマロであった。

「結界か……！ 小癪な！」

斧がまるで工事現場のようにハイスピードかつ効率的に振り下ろされる。ミシッ、何かが軋む音が響く。

「そう長くは保たないな……清怒川くん、へも太郎くん、今のうちにヌーを！」

「ふん、そう簡単に渡しは……！ な、なんだ、身体が、動か……!?」

「オン・キリキリ・オン・キリキリ・オン・キリウン・キャクウン……!!」

「パパ！」

地面に倒れたまま、パパが結ぶのはヤンデルもびっくりの不動金縛りの印。

「今だ！」

「『返』！ 『臭』！」

「ぎゃっ！」

「におっ」

クーヤンの口から飛び出した漢字が、身動きの取れない辻に命中する。辻の手の中から離れたヌーメンは、くると吹っ飛び、そのまま寺の奥の方へ……

「つて、ダメじゃん！」

「くっ、おのれ……ひいっ！」

斧の一撃が、真っ先に辻を急襲する。逃れる暇もなく、直撃を喰らった辻は、痛いとかいう問題を超えている悲鳴を残して、今度は

一気に壁を突き破ると――そのまま、空の向こうへと消えてしまった。

「とりあえず一難は去ったけど……」

バルドソドルのターゲットが、ソワカちゃんたちに向けられる。

「ひいっ」

「だ、大丈夫、結界もあるし……」

「えっ、マロ、もう限界？」

「きゃー！」

『天誅』の文字が赤く光る。バルドソドル、渾身の一降りが、彼らをまとめて叩き潰さんとする。ついに本当にマジで万事休す。

「ほら、これを使いなさい」

その時、突如ソワカちゃんの元に、何かが投げ込まれる。とっさに受け取ったそれは、金色に輝く五鉈ハジユラ杵。

「こ、これは……！」

「ソワカちゃん！」

「うん！」

構えた五鉈杵に光が収束していく。ソワカちゃんも、渾身の一発、強烈な虹色のビームが、バルドソドルを撃つ。

「やった！？」

「いや……？」

バルドソドルには、傷一つなかった。しかしその動作は、斧を振り上げたそのまま、完全に停止している。

「どうなってるの……？ それに、この五鉈杵……」

ふっ、とバルドソドルの「天誅」の文字が消える。と、その腕、足は音もなく胴体の中に消え、元の石板に戻ってしまった。

「闘う必要がない、ということが解ったのですよ」

「におってー」

バルドソドルの後ろ側から、一人の僧が姿を現す。

「あなたは……！？」

頭の上にヌーメンを乗せたその僧は、年格好もその服装も、ほと

んど辻のそれと同じ——しかし、その全身から発せられる、神々しいまでの気品が、彼とはまったく別の人種であることを如実に示していた。

「本物の、高丘親王……！」

一同は、誰からともなく、自然に礼拝の所作を取っていた。

「そうかしこまらずに」

「いや、でも……」

ソワカちゃんは思わず辺りを見回す。

古びていたながらも、それなりに整然としていた寺院は、一連の騒ぎによってもはや跡形もなくなっていた。美麗を誇ったミイラたちはほとんど地面に転がり、天井にはでっかい穴。ブルーの空が目につく。

「ごめんなさい、お寺をこんな」

「いやいや、別にあなたたちが悪い訳ではありません」

「……ん？　ねー、ソワ……沙流呂ちゃん」

「何よへも太郎、人が謝つてるところに、」

「このミイラだけ、なんか妙に若々しくない？」

クーヤンが指さしているのは、ほとんどの女身像がなぎ倒された中に、ぽつんと残って立っている一つ——なるほど、妙に生々しい一連のミイラたちの中でも、その紗をまとった身体は、確かにまるで生きているように若々しい。

「だからどうしたの……？　って、この顔、どこかで見たような……」

……

マロがはつとしてそのミイラを見上げる。

「はて、こんなミイラはなかったような……」

「え」

一同の視線がそのミイラに集まった瞬間だった。そのミイラは俊敏に身を翻し、しゅたり、とバルドソドルの上に飛び乗ったのである。それとほぼ同時に、爆音とともに天井なき上空に、大型ヘリコプターが姿を現す。

「な、なに！？」

あつけに取られる彼らを前に、動くミイラ——いや、その少女は、一瞬のうちにバルドソドルにワイヤーを結わえ付けてしまう。そして、ヘリから降ろされたワイヤーにそれを繋ぐと、そのまま空へと飛び去ってしまった。

「イー！」

「イー！」

「あ、あいつら、グルグル！」

「思い出した！ あの女の人、根田切先生のそばにいた、あのナス！」

まさにそれは、ものの数秒の出来事であつた。あまりの手際の良さに、一同ただただ呆然とするしかなかった。

「まあ、大丈夫でしょう」

親王（本物）は、空を見上げてこともなげに呟く。

「あれを動かす原動力は、このヌーですから。ヌーがいなければ、あれはただの壁ですよ」

「におつてー」

完

「いやー、大変な休暇だったなあ。しかも、結局手ぶらだし」

象に揺られ、夕暮れのジャングルに行く旅の一行——ソワカちゃん、クーヤン、パパ、メカ沢先生、マローラモ。すでにすっかりできあがったパパは、そう言いつつも美味しそうに杯を干す。

「ヌー……ヌーメンを連れて帰るわけにはいかないからね」

「しかし、特にメカ沢は、ニセ高丘親王に完璧に騙されてたからな。気をつけないと、新興宗教とかに引つかかるぞ」

「ああ、すまなかった」

「しかし結局、あの寺とバルドソドルってのは、いったいなんだっただんだ？」

「あの寺は元々、ミイラをいつまでも若々しく保つために、地脈からエネルギーを吸い出すように作られていて——いわば建物自体が巨大な魔方陣だったんだ。そこに親王がヌーメンを持ち込んでいたから、その生命エネルギーが寺の中に充満してたんだよ。親王——それに辻政信の不老不死は、それが原因だ」

「俺たちも、殴られたりバルドソドルに吹き飛ばされたりしたけど、気がついたらすっかり治ってたもんね」

「そして、あのバルドソドルはそのエネルギーを利用して動く、一種の石神——即ち宿神、侵入者をサエギる道祖神の類だろう。こうした神はしばしば、『セキ』『サカ』『ソコ』などの地名があるところ^{いま}に坐す。あの寺が欧米人に『セクシー・テンプル』なんて名前で呼ばれていたことも、おそらく何かの所以あつてのことだろう」

「台密の護法神・摩多羅神とも関係があるかも知れないな」

「あるいはね」

「……それにしても、本当に、この2人がいなければ、俺らはどうなっていたか解らないな」

ソワカちゃんとクーヤン——疲れたのか、2人ともパパにもたれ

かかって、静かに眠っている。

「……あなたたちが、この世界とは別の世界から来たこと——そしてその背中に、辛い運命を背負っていることが、私には解ります」
前夜のこと。ソワ力ちゃんは、親王の部屋に1人呼び出されていた。

「この寺は、私が空海和上から預かった生命の源——丹生ヌーの力を増幅させる、不思議な聖地です。この寺に留まり修業をすれば、私のように永遠に近い命を得ることが出来るでしょう」

親王は膝の上にヌーメンを乗せ、ソワ力ちゃんに優しい声で語りかける。

「におってー」

「……もし、あなたたちが望むのなら、ここで——そう、あなたの死なせたくない大切な人とともに、いつまでも暮らしてもいいのですよ」

「……」

「必要ならば、私が彼らにそうするように命じても構いません……どうしますか？」

「ありがとうございます。でも、私には……パパとの約束があるので」

パパの死の真実にたどり着くという、大切な約束があるので——
私たちは、元の世界に戻ります。

ソワ力ちゃんの答えに、親王は穏やかな微笑みを浮かべる。

「……きつとどんな遠い場所に行こうとも、あなたの父と、和上は見守ってくれますよ」

「におってー」

ヌーメンが、ぴよこん、とソワ力ちゃんのそばに飛び移る。

「私も影ながら、あなたの旅の成功を祈っています」

「ん、マロ、どうしたんだ？」

マロの指さしたのはパパの隣——そこにいたはずのソワカちゃんとクレーンは、いつの間にか姿を消していた。

「……え、俺たちの他に誰かいたっけ？」

「いや、僕たちはずっと3人で旅をしてきたはずだろ？」

マロは一瞬首をかしげるが、間もなく、なにやら納得した様子で1人うなずく。

「それより、俺、そろそろ日本に帰ろうと思うんだ」

「ようやく身を固める決意がついたかい？」

「からかうなって。一旦チベットに帰って、グルに挨拶を済ませてからの話だけだな」

「でも、僕もそろそろ大学に戻らないとな。マロはどうするの？」

「……」

「世界の女たちと会うための旅……すごいなそれは……」

「よしっ、じゃあ俺たち3人の前途を祝して！」

「」「乾杯！」「」

夕闇に覆われていくジャングルに、澄み切った鳥の声が響く。まるで迦陵頻伽の歌を聴いているような夢見心地のうちに、象はゆったりと歩みを進めていく。

「……ちゃん、ソワカちゃんってば！」

「え……？」

「ソワカくん、大丈夫かい？」

「んもう、何ぼーっとしてるんだよ！　せっかく壁を抜けられたのに……」

「壁……？」

ソワカちゃんが振り返ると、そこには必要性をまったく感じない壁。

「バルド……ソドル……？」

「何寝ぼけてるのソワカちゃん！　ほら、早く逃げないと、あいつらすぐ追いついてくるよ！」

「う、うん……」

そうだ、私はあの無節操魔術師に追われて、それからあの壁に飛び込んで……。

「……もしかしたらソワカくん、君はあの壁を通り抜ける途中で、何か不思議なものを見たのかい？」

「え……」

「夢も中間、生、存在、そして死もまた中間——ソワカくん、おそらく君が見たのは……」

「小難しい話なのでクーヤンパス！」

「うわー」

「えーっ！ でも俺も解らないよ！ ソワカちゃんパス！」

「パス！」

「パス！」

走るうち、ソワカちゃんの中から先ほど見た景色は、まるで夢が溶けていくように消えていく。あるいは本当に、単なる夢だったのかも知れない。しかしその背中に残ったパパの温もりだけは、しばらく消えることがなかった。

「さあ、行くよクーヤン！」

「うん！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2541i/>

【書いてみた】ソワカちゃん第10話（その2）偽訣「タイムマシン・ノー・リ

2010年10月8日14時44分発行